性転換で⇔リア充ライフ！

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
性転換で⇔リア充ライフ！

【Ｎコード】
Ｎ７０２８Ｚ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
朝起きて部屋にある姿見を見るといつもと何かが違う。　あれ？俺ってこんな可愛かったｋ……ってなんじゃこりゃーーー！！？
ある日ふと性転換しちまった男子校生のお話！　【アカウント変えました。すいません！】　☆話数カウントとサブタイトル変更

登場人物（前書き）

内容に関わります

登場人物

○多田（ただ）　龍介（りゅうすけ）
女：りゅうな
高1。　もとから小さい。
胸はまあある方（竜太談）

○多田　竜太（りゅうた）
龍介　（りゅうな）の弟。
中3。　龍介をりゅうなにした主犯。
モテるらしい。

○赤木（あかぎ）　冬希（ふゆき）
龍介　（りゅうな）の担任であり、数学教師。
変態なくせに女子から人気アリ。
龍介　（りゅうな）に気があるようだが・・・・？

○町口（まちぐち）　香歩（かほ）
学校のマドンナ。
女になった龍介　（りゅうな）に惚れた。

○白崎（しらさき）　実（みのる）
科学部部長。　竜太と仲がいい。

○細川（ほそかわ）　マサキ

元男。　身長は女子の中でも大きい方。まあ、ほかも大きい。

スタイル抜群。　さらさらの違反茶髪。

1：じゃあこれは何だ

俺は部屋にある姿見で自分の見た目を確認した。
どう見ても、いつもの俺とは違う容姿。
ふっくらとした体つき。　出る場所はしっかり出ている。
「……女になっちゃった？」
恐る恐る確認するように言った。
まさかなー、そんなラノベとか漫画みてーな展開ねーよなーハハハ。

じ　ゃ　あ　こ　れ　は　何　だ　？

現実だーーーーーーーーーーーーー！！！
心の中でありえないぐらい叫ぶ。
「龍介（りゅうすけ）ー？おきなさーい」
龍介？！それ俺の名前……っつーこたあ、みんなの記憶の俺という男はけんざ――
ガチャ、とドアが開き、お袋が入ってくる。ノックしろクソババア。
「あら？龍介の彼女？可愛いわね」
え、可愛い？
そう言われ、俺は姿見をのぞく。　まあ確かに可愛いっちゃ可愛……じゃねーよ。
「お、お袋、俺どーしよ」
「……」
無視かよ！無視なのかよ！
「……きっと疲れてるんだわ」
なかったことにしやがった！め●かボックスじゃねーんだから！！
俺ですよーーーー！！あんたの息子だよーーー！
「兄ちゃん遅刻するよー」
おお！お前は我が弟の竜太（りゅうた）！

「……」
「……？」
「母さーん、オレまだ眠いみたい」
お前もかい！

どうする！？俺！
「あなたー、ちょっと見て頂戴」
親父呼びたがったクソババア！！！
「どれどれ？龍介が女に……」
と、俺を見るたび言葉を失う。
何か変かな……、服は着てるし、髪の毛も乱れてないし、まあ変つったら性別だな。
「……龍介……なんだよな……下に来なさい」
説教モーーーーーーード☆

「どういうことだね、説明しなさい」
「って言われても、俺……」
「……はあ」
ため息つきてーのはこっちだわ！！
あまりの展開に読者ついていけてねーよ！俺もだけどよ！！
「何か、起きたらなってた」
「今日は学校を休みなさい」
無視かよ。今日俺散々だよ。泣きてえ。
「あーい」

やることがないので、部屋にこもってゲームをしている俺。
ノックの音がする。　俺は返事をした。
入ってきたのはお袋だった。
「……洋服買いに行きましょ」
やる気のなさそうな声で言った。
「なんでー？」
「男の服じゃダメでしょ……」
「うーい」

俺は（元）男だから、女物なんて全くわからなかった。
全て、お袋と店員に任せた。
数着買ったところで帰宅することになった。

「えー、学校いかなきゃ行けねーの？」
「こら、女の子なんだから口調に気を付けなさい」
「俺男だよー」
「まあそうね……」
「制服は買っておくから。先に帰っておいてくれる？」
「うーい」

つーわけで、紙袋両手に一人で家に帰ることになった俺だった。

1：じゃあこれは何だ（後書き）

私はいつだって本気だ。

2：よりによって

大分この体にも慣れたな。　まあ二日目なんだけど……。
お袋の買ってきた制服を来てみる。　スカートなんて初めてだわ。
初めてのはずのスカートが妙にしっくりする。なんでだろーな。
よく考えたら髪の毛が腰まである長さだ。　縛れるようなセンスないし、そのままってのもなー……。
「入るよー、“姉ちゃん”」
ノックもなしに弟が侵入。
弟は中３のガキ。……なんだけども。
女になったとたん、身長が逆になるんだもん。あいつに見下されるなんてよ……。
それによりによって「姉ちゃん」なんて呼ぶなんて……殺すぞ……

「何？シャーペンの芯貰うよ」
「ちょ、待て待て。だったら新品を上げよう」
「マジ？サンキュ」
……あれ？ここらへんに置いたはずなんだけど……。

「ねえ」
「あん？」
振り返らず探しつつ答える俺。
すると、後ろから不意に腰に手を回される。
「ちょ？！」
待てって！近親相姦になる！　つーかどこ触ってんの！？
「なんでさー、あーんな憎い兄貴がこんな可愛い姉貴に変わるんだよ」
「…ぁ…やめ……っ」
「ありえねー」

体育系の部で鍛えた腕の強さには今の俺では勝てない。
ゆっくりと回された手が上へ上へと上がる。
「……やめ…てってぇ……」
涙声になりつつ言う俺。　ほんっと情けねえ。
「……りゅうたぁ…」
ぴた。
手が止まる。　幸い胸にまで腕は回ってない。
「……ふぇ？」
「……んな声出すなって……」
「？」
振り向くと顔を真っ赤にした竜太がそこに居た。
口を抑え、そそくさと逃げるように去っていった。
「……？シャーペンの芯は？」

3：オレなんだ！！

翌日。
俺は女子の制服で階段を下りていた。
うぅ……妙に足がスースーする…。寒い。
「あ……」
そこで、あの弟にあった。
まるで、何か悪いものでも見つけたように呟いた。
俺はポケットから芯を取り出し、突きつけた。
「昨日、渡しそびれたんだけど」
ちょっと怒り気味で。
どうしても、下から竜太を見上げる姿勢になってしまう。
頬を膨らませ怒ったせいか、萌える構図に近いポーズになってしまった。
奴の反応はというと……。
昨日と同じく口を抑え、真っ赤に顔を染め、目を泳がせている。
使えなさそうだったので、胸ポケットに芯を押し込む。
お腹空いた。　朝食を腹に入れますか。
竜太をスルーしようと横を抜けたとき。　腕をつかまれた。
「は？」
「……あ、いや、なんでもない」
……、だったら手を離してくれますか。
「離してよ」
「……！　ごめんッ」
半ば振り払うように竜太は俺の手を離した。
ちょっと痛いんですけどー。

まあそんな事はさて置き朝食朝食♪
今日のは……、目玉焼きにはむ、トーストって普通……。

「ねーえ、龍介。」
お袋が突然話し出す。
「今日から「りゅうな」って名乗りなさいな。」
「はー！？」
まあ、そうだよな…。
「一人称もしっかりね」とお袋。
それも面倒だけどな…。

「あ、あとね、あんたら本当の兄弟じゃないから」

何を唐突に言うんだい……って、は？
「きこえたー？」
…え？……え？
「ほらー、十年前、パパと再婚したじゃない！」
…あ、そういえば……。
昔「似てる名前だから仲良くしなさいね」って言われた記憶があったりなかったり……。
「ごちそうさま…」と俺は無気力に言う。
真実を知った俺は、重い足取りで荷物を取りに向かった。

外に出ると奴がいた。　まるで、俺を待ち伏せていたように。
「姉ちゃん……、オレ…」
「何してんの？遅刻するよ」
俺はその先を聞きたくない。
「え…うん…」
そんなこと知ってるけど？みたいな返事をする竜太。
「ね、ねえ！」
「？」
呼び止められ、嫌々振り向く俺。　嫌でも振り向かないと無視し

てるみたいで気持ち悪いじゃん。
「姉ちゃんを女にしたのはオレなんだ！！！」
……。　嘘だろ……。　なんの利益があって……。
「オレ、姉ちゃんが好き……」
何言っとるんですか。
「さ…最初は惚れ薬を科学部の部長に作ってもらおうと思ったんだよ。
だけど、あいつが世間体を考えろって……。で、でも！オレこれで満足してる」
な…何を馬鹿な…。　これは現実か！？つーか満足すんな！
俺の弟がこんなにホモの訳がねえ……。　死にてえ…。
「き、きいたろ！？オレらは兄弟じゃねーし…、な？」
「「な？」じゃねーーーーーーし！！！」
俺が叫ぶと、それが想定外だったらしく、ぽかんとしている。
「オ…私はあんななんかと付き合う気はない！」
「だけどぉー」
「あんたもそこそこモテるんだろ！？コクった美人とリア充ってろ！！」
捨て台詞を吐いた俺は、なるべく追いつかれないように（っつっても相手は体育系）
全力で走った。　後から追う人影は全くもって見えなかった。

学校――
えーっと、まずは教務室に…っと。
自分の内履きにはきかえたらまずいと思った俺は、客用のスリッパを（勝手に）使う。

「失礼しまーす」
ゆっくりドアを開けた。　電気がついている。
だが肝心の教師がいない。　早かったかな……。
「多田(ただ)君？」
「ぶわぁあ！？」
後ろからの奇襲。　振り返るといたのは、クラスの担任・赤木(あかぎ)だ。
「先生……、校内は禁煙ですよ」
朝からタバコを（しかも禁煙なのに）なんてこいつ……。
「あぁ、すまんすまん、ハハハ」
笑い事じゃねーだろ。　ミスしたら火災報知器鳴るどころか、警察ざただぞ。
「で、多田君？」
「あ、はい」
「へえ、可愛くなったねー」
と、俺のケツを触りセクハラする。
死ねという思いを込め、顔面パンチ。　メガネにゃ当ててねー。
奴は鼻から血を流しつつ、メガネを抑える。
「で、手続きとかいるんすか？」
「そーだなー、じゃあ俺とえっちなk「死ね」
割りと俺は本気で言った。
「……とくにないよ。顔出してもらえればよかった」
「あっそ」
出ていこうと、ドアに手をかける俺。
「先生…いや、俺は本気だからな」
……。なにが？
「好きだぜ」ピシャン。
かき消すように勢い良く閉めるドア。　あんの数学教師ィ……。

４：貞操の危機

４話にしてなんだが話を整理しよう。俺の中じゃとっくにキャパオーバーおこしてる。
えーっと、まあ俺が弟のせいで女になたことはいいだろ？嫌でも理解な、はいＯＫ。
んで、弟と俺は実は兄弟じゃなく、しかもあいつは俺が好き……。
更には数学変態教師も俺が好き（まあ本気かは知らんが）……と。

俺の貞操の危機じゃねーーーーーッか！！！

ヤバイヤバイヤバイ！　女になってから世間体的には問題ないし、相手らのやりたい放題じゃん！！　しかもこの体じゃ抵抗するに出来る力もほぼない！
……死ぬ。

とまぁ、一人自室で宿題をしつつ悩む俺だったんですね、はい。
いやー、一人はいいね！心が休
「姉ちゃーん☆」
ノックもなしに竜太が入ってきた。
「きゃあああああ！！」
一応叫んでおいた。　女声で。

□■□■□■□

「勝手に入ってくんなっつったろ！！！！！」
「ごめんごめん」
「……ったく、――で、何かようあんの？」
「え、いや、別に」

じゃあ帰れよ、お前。　邪魔だし。　まぁ、暇になったわけだから言える立場じゃないんだけど。
「ねえ」
リュウタは妙に甘い声で言った。　身震いする。
「……なに？」
「姉ちゃんが…欲しいよ。オレ本気なんだよ！」
お…俺は本気じゃねーし…！　つーか姉ちゃん呼ぶな！俺は男だっつーの！！
「姉ちゃん、姉ちゃん……」
なんだこいつ気持ち悪ィ……。

「……りゅうな」

ぞくりとした。　鳥肌が立ったほど。
嫌だ。　名前を呼ばれると言うだけで感じてしまった自分が。
そして、小さく心の中で喜んでいた自分が。
「……。」
しばらく沈黙が続く。　……何か…話さないと…。
多少涙目になり、両手を胸の前に置き、おろおろと目を泳がせる俺。
まるで欲しいものをねだるような女子。

「我慢できない」

それだけ、はっきりと響いた。　今まで張っていた何かがぷつりと切れたように。
「や……ちょ…っ」
いきなり竜太は俺の手を掴み、俺をベッドに放る。
「…ぅあ…」
激しく倒れたせいか、少し痛い。

それにも構わず、竜太はネクタイを緩め、俺にのしかかろうとしている。
これは本格的にやばい！　ドアはきっちり閉めてあるし……！！！
そんなことを考えているうちに、あいつは動いていた。
竜太の手が俺の頬と髪に触れる。
愛らしそうに指先で、頬から首へ流れるようにゆるりと撫でていく。
「…ひゃぁ…っ」
くすぐったい。
そして、自分でも情けないぐらいの声が出る。
竜太が俺の制服のボタンに手をかけたとき

「二人ともー！ご飯よー！」

と、階下から救いの手。
竜太は「チッ……」と舌打ちをして手を引いた。　怖いです。
「残念だったね、また今度続きをしよっか」
「……しねーよ、バーカ」

□■□■□■□

「ごちそうさま」
と俺は箸を置いた。　すると、
「待ちなさい」
と親父が珍しく俺を呼び止める。
「学校はどうだった」
「別に？」
あの教師を除いてな。
「友達も、か？」
「ああ」
変わりなく男友達とつるんでるぜ。　逆に女に絡まれるのが多い

な。
「そうか、ならいい」
んだよ、心配してんのか？うちのクラスは比較的仲いい奴らの集まりだしな。
もし男子に突き放されても女子とやってける（気がする）。
まあ、あの変態教師が担任ってのが嫌だよなあ。
「うん、大丈夫」
と親父を安心させるかの様に俺は笑った。

□■□■□■□

ふと考えると、この体……戻れないのか？
明日中学に乗り込んで聞き出してみっか。
つーわけで、おやすみー☆

5：おまじない

放課後――
　俺は嫌々ながらも、弟の学校の門前にいた。
奴から聞き出したところ、頼んだ相手は科学部。なんとまあ非現実的な……。
中学生の科学部でも性転換する薬なんて作れねーだろ、おい。
　どーやって聞き出したか？んなもん関係ねーだろ……。

　俺は怪しい理科室の前で足を止めた。　絶対ココだ。
声は一切しない。　怖いぞ、おい。
　ノックをし、ドアを開けた。
無駄に暗い室内。　よくわからない異臭。
「誰」
　端的に返される。　多分部長だろう。
「あーっと、多田です！多田竜「あぁー！話は聞いてるよ！なにせ超絶……」
　云々云々。　俺の話をする彼。
「えーっと、そーゆーのいーんで、戻し方とか」
「戻す？無理無理無理！」
　否定された？！
「じゃあ、戻せねーの！？」
「勿論だよー、そうそうそう。」
　肯定された？！
「しっかし可愛いね奥の部屋でゆっくり話そうか」
「年下にセクハラされる！！！」
　失礼なことを言ってしまった！　そしてセクハラなら弟に散々やられてるぜ！！

□■□■□■□

「えーっとなぜ二人きり？」
にこにこと、頬杖を付きこちらに向き合う部長さん。
「気にしないでくださいよー、ちょーっと二人で話をしたかったでけっすよ」
じゃあなんで鍵なんて掛けてるんですかぁ？……なんて俺にゃ聞けねーよ。そしてそのほほ笑みが怖い。
「へえ……」
ジロジロと人を見るな。　そして黙るな！
黙っただけではない。　俺の顔をじっくりゆっくり見ていく。
その目は、科学の観察なんかじゃなく愛するものを見るような目。
「本当だ」
微笑みがにやつきにかわる。
「な…何？」
「可愛い」
……俺帰るね☆
「あの、用事終わったんで帰――」
立ち上がったとき、腕をつかまれる。
「まあ…待ってくださいよ…ね？」
「……ッ」
文科系だからといって油断した！　竜太ほどじゃないけど、力が強い。
ましてや俺は今女だったこと忘れてた……。
ぎゅう、と力が強くなる。
「……いたっ」
「おぉっと」と手を離してくれた。

「……」
「すみません。ついつい我を忘れて」
忘れてたの！？　この人ある意味怖いよ！！

□■□■□■□

中学を後にした俺は重い足を家に向け進める。　家帰りたくねー。
家の前には、弟が立っていた。
「！　……ただいま」
「おかえり、りょうな」
「あんたが俺の名前呼ぶとうぜーわ」
竜太は「あはは」と笑うだけだった。　あ、そだ、今日は鍵かけてねよーっと。

□■□■□■□

……宿題終了…っと。
そう思いつつ俺はペンをおいた。　そして、窓越しに空を見る。
黒く空が曇り始める。　携帯を開き天気予報を見た。
「……」
表示されていた単語に絶句する。　……「嵐」。アイドルグループじゃない方の。
……嵐ー！？　…と思うと外がぴかりと光った。
俺は肩を震わせた。
高校生…しかも男子で言う物アレだが……俺は心底雷が怖い。
「や……」
誰か……一緒に…。
俺は身を縮め、目を固くとじる。

「姉ちゃん」
後ろから聞き覚えのある声がする。　振り返ると奴がいた。
「……竜太ぁ」
泣き出しそうな声で俺は言う。
あいつが嫌いだけど苦手だけど不本意だけど、それなんかより雷が俺は怖い。
誰かといたい。
「昔からダメだったよね、雷。でも大丈夫。」
優しく言った。
そして、奴は俺の肩に手を置いた。
「……？」
顔をゆっくり俺へと近づけ――

「……え？」
静かにキスをした。
「おまじない」
そっと言い、不敵に笑む。
「ば…バカ！」
俺は力の限り竜太を叩く。　だけど、力が入らない。
そんな弱々しい抵抗に奴はただ微笑むだけだった。
今度は…雷どころじゃねーよ…心臓がッ…！

「おまじない、大事にしてね。オレのこと、“スキ”になるおまじない」

6：仲良くやってる（前書き）

このお話から百合もスタート
ＧＬです。レズです。同性愛です。ええ。

6：仲良くやってる

うぅ……、一日経ったけど忘れられないぜ。
『オレのコトを――』
昨日からずっとリピートされてるあの言葉。
意識し始めている証拠なんだろうか？

とか思いつつ教室に入る。
おはよ、と俺が言うと数人が返してくれた。
俺は席にバッグをかけ、一息。　最近ため息多いな…。
いつもの男子の輪に入ろうとしたとき――
「きゃ……！？」
誰かが俺の胸を触る。
「ちょ…お前何…？！」
無理に手を振り払い、腕で胸を隠す。
「やっぱマジで女なんだぁ…へぇ…」
な…何！？まさか…なぁ？！
だけど、それだけじゃ済むはずなかった。

ザバァ、と。

“上から水をかけられた”。
「……！？」
「いえー！下着スケスケ！」
さ……

「最ッッッ低！！！」

俺のかわりに女子が叫んだ。
その女子は男子らに近づき、ビンタだの、教科書で殴るだの……。
男子の目はまだ俺にむいていた。　……何が「仲良くやってるー」だよ。
居づらくなった俺は、教室を飛び出した。

□■□■□■□

「……はぁ…は…は…」
数人の男子が追ってきたのでほぼ全力で走った。
ここは校舎の人目がつきにくい場所。　無論日当たりが悪いため……
「……さむ…」
衣服は濡れたまま。着替えないと……。

「……多田…さん？」

「…！」
誰？まさか見つかった？
「私だよ、町口（まちぐち）　香歩（かほ）」
町口さん？　クラス…いや、学校のマドンナの？なんで俺に？
顔を上げると、本当に町口さんがいた。　その、綺麗な笑顔を俺に向けて。
「大丈夫？私、なんでも相談聞くよ」
にこり。もう一度笑った。
「あ…いや、もう大丈夫…」
と、俺が言うと彼女は「そう？」と不思議そうに答える。
「じゃあ帰る？」

「…あ……」
そう言われると、きついかな……。
「でしょ？大丈夫。女子全員は仲間だよ」
「本当…？」
「うん」
心強い…かな。
「じゃあ保健室行こう。着替えないとね」と俺の手を引く。
「え…あ、うん…そだね」
手を引かれたことに対して少し戸惑う俺。
「どうしたの？」
俺の戸惑いに気づいたのか、手を離し、止まった。
「……な、なんで俺なんかに」
しまった、つい本音を…どうしよう？傷ついた？
「……きだから」
……え？

「好き…だから」

…は…い？
「…もう！」
彼女は俺の手を再び取り、今度は自分の胸に押し当てた。
「……っ！？」
「ほら…ね？…ドキ、ドキ、ドキ…って」
胸に押し当てる力が強まる。かすかに感じる音…速い。
「……」
「なんでかな…男子のときなんて目にも入らなかったのに」
ちょっとひどくないっすか！？
「凄く……ドキドキするの」
と、手を離した。
「こういうのって…おかしいのかなぁ」

真っ赤になった顔で、笑う。
手には胸の感触が残っている。　町口さん着やせするタイプだね！
！…ってちげーーし！
「これからもっと、アタックしちゃうね…ふふ」
無邪気に、笑った。

6：仲良くやってる（後書き）

お気に入り沢山ありがとうございます！
毎回毎回「増えてる…だと…」とか思ってます。
まともな？あとがきでした。

7：襲われたりとか

「こら！！多田さん！しっかり掃除しなさい！！」
と、言われても俺は口を開けたままぼーっとしていた。
昨日……アレってコクられたのかなー…？学校のマドンナに？まさかあ。
でも、確かに「好き」って……。
「多・田・さ・ん」
「うぎゃぁあ！？」
「クス…」
って、町口さん！？顔近いっすよ！！
「ちょっとカホー？多田君かわいそー！」「キャハハハ　マジでー！」
面白がってんじゃねーよクソアマ！！！　……なんて言えませんよ、ハハハ。
「しっかりやろ？」
「え？　うん…ごめん」
元気なく答えると、不敵に笑い、
「昨日のコ・ト？」
と、耳元で妖艶に囁く。
「〜〜〜〜ッ！」
まさに図星。　俺は真っ赤になって情けなく逃げた。

＊　ｃｈａｎｇｅ　＊

「多田ぁ…きいてる？」
「ん？あ、ああ、何？」
「きーてないじゃん」
ここは中学。　竜太が通う学校だ。

「お兄さん、ケッコー可愛いらしいじゃん？痴漢とか大丈夫よ？」
彼女は竜太の友人。　小学校からのなかでもある。
「マサキ……んなのねーって……」
「うん？何その溜め？あるんでしょ？」
竜太の頭に過ぎるのは「兄」でなく「姉」。そう、今は彼でなく彼女なのだ。
「今……女……だしな」
「はぁ！？」
教室に響く大きな声で彼女は驚く。
「そんなのまるで、あたしみたいじゃーん」
“あたしみたい”と言うのも……
「そーいや、マサキも元男か」
例の科学部部長に頼んだのだ。　もう彼は普通に賞でも受賞していいと思う。
理由は不明。
――スタイルは、竜太の姉と大違いで抜群だった。
モデルばりのプロポーション、さらさらとなびく（違反の）茶髪。
男女誰でも惚れいりそうな声。
まあ、マサキはどうでもいいとして。
「で？」
「で……とは？」
「襲われたりとかしないの？」
「しない」
と思う、と小さく言う。
「へぇー……」
そんな曖昧な答えに対してマサキも曖昧に答える。

「やめて！！」
そんな二人の会話も知らない俺は…。

「なんでだよお…何でボクじゃだめなんだぁ？…んふひひひ」
「きもい！くんな！！」
非常階段で襲われていたのである。
このキモデブの告白を断ったらこのざまだ。
「そんなこと、いうなよぉおお」
「ひっ！？」
角に追いやられ、両腕をがっちりとホールドされる。しまった！
殺られる！！
きもい顔が段々と近付いていく。こいつキスでもするつもりかよ！？
「……っ！？」
死ぬ……ッ！！

ゴン……！

「……はふ……」
ずるり、と俺はその場に座り込む。
目の前には倒れたデブが転がっていた。
「大丈夫か？」
「へ？」
聞き慣れない男声に顔を上げた。　顔も知らない。
「えと……どなたでしょうか？」
「……！いや…じゃあな、気をつけろよ」
彼はそれだけ言うと、立ち去ってしまった。

＊　ｃｈａｎｇｅ　＊

あの日からというもの、姉の表情が変わった。
まるで、恋をしてる女の子みたいな顔。
「姉ちゃん」
聞こえないような小さな声で言う。

無論、振り返りさえしなかった。

……オレは何を求めてたんだよ。

7：襲われたりとか（後書き）

お久しぶりでございます
ストックがこれほどになく滞っております

8：ただの、ノイズ

翌日の昼休み。　俺は外にある非常階段にいた。
…冬だから寒い。
「どうしたの」
不意に声がかけられた。
「あ……」
例の彼だった。
「お？」
「き…昨日は助けてくれてありがとうございました…ッ」
「ん？あぁ、忘れてた」
「へっ！？」
「うそうそ。　じゃー、お礼でも貰おうかな？」
お、お礼…？なんだろ…俺にできることかな。

「キス…がいいなー」

キ、キキキキキキスゥ！？キ、キスって…
「さ…魚？」
「違うよ」
ひぇえぇ！？　うあ、そ、そんな…。
「君は目を閉じてればいいし」
「あう…」
そ、そんな微笑まないで！　…くぅ。
俺の頭は、真っ白だった。
「…嫌？」
「…いや…別に…その…」
「じゃ、する？」
「うぁ…えと…」

答えられず、無意識のうちに目を固くとじてしまう俺。
「このスキに」
そう聞こえた。　あとは、本当に簡単だった。
唇に柔らかい感触がする。　目は…開けたくない。
竜太の優しいキスじゃなくて…でも、激しくなくて…。
「……ごめん、嫌…だよね」
「そんなこと…」
何故か、竜太なんぞよりすごくよかった。
「…あの…名前教えてくれませんか？」
「ごめん…それは、無理」
なんで！？
「それに…これ以上君と関わっちゃダメな気がして」
「……」
「……俺、行くね」
声がでない。　もう、二度と会えないかもしれないのに。
そう考えると余計に出ない声。
“俺”と“私”が思った。

好き、なんだって。

やっとわかって顔を上げたとき、彼はもう、居なかった。
「……」
その時、チャイムが鳴った。　ただの、ノイズにしか聞こえないチャイム。
だけど、教室に入る気力なんて俺にはなくて。　ただ一人。外で静かに泣いていた。

□■□ｃｈａｎｇｅ　マサキｓｉｄｅ□■□

放課後、あたしはすることもなくブラブラと歩いていた。
何回かナンパされたけどォ、いい人いないし無視した。
「ん？」
前方に……あ、やっぱりあの人は竜太の姉貴さん？
ゆーっくりと近付き、後ろからァ～～
「わっ！！」
「ぎゃあああ！？」
すっげーびっくりされたんだケド……。
「え…あの…誰？」
「竜太の友達のマサキだにょーん☆」
「りゅ…竜太のお友達……」
アレ？ジロジロ見られてね？
「……俺の男の時よりデカいし……。む、胸だって今より…」
あちゃー、まさかのコンプレックス持ち。
「あのォ…暇だったらお茶しませんかァ？」
「え…う…はい」

□■□ｃｈａｎｇｅ　龍介ｓｉｄｅ□■□

「え…同じ待遇だったの？」
「そォですよォ？あ、このケーキおいしィー☆」
にしても女子っぽい！　でも何で俺に…？
「ねッ！　メアド教えてー」
は？
反応を無視。　バッグを取られ、メアドを登録された。

「うし。あ、そォだ。　……竜太のコト、どう思う？」
「！！！」
それが本題！？
「べ…別に？」
「あ！その反応ッ！　別に意中の人が居るトカ？」
「……」
「え…あ……図星？」

9：元気

「別に意中の人が居るトカ？」
……な。なん…でわかる…んだ！？
「…あ…図星…？」
頭に浮かんだのは、竜太じゃなかった。
あの、人。　俺を助けてくれた、あの人。
だけど、いずれ俺は男に戻りたいし、忘れないといけないけど。
彼を想うとどうしても……。
「あたしが応援しましょっか？」
「！？」
何を言い出すんだこの子…。
「…襲ったりは…？」
「するか！ど阿呆！！」
怖ッ！！　この人の場合「襲う」って「殺す」って意味合いだと思う！！
「そんじゃ、何かあったらメールちょーだい」
いつの間にかタメ口だし…。

□■□ｃｈａｎｇｅ　竜太ｓｉｄｅ□■□

「姉ちゃん？」
「んー？」
――…最近。
姉ちゃんの反応が妙に軽い。
逃げたり避けたりしなくなったし、オレの前で笑うことも増えた。
これはいいことなんだろうけど、何故か素直に喜べない。

「姉ちゃん、キスしていい？」
「今急いでるの」
ス…スルー！？　前なら赤面して「何言ってんのお前！！」とか…。
オレへの気が…ないみたいな…。

「……と言う訳で呼び出しだ」
「ありえないねーッ」　「あたし、暇じゃないんだケド」
呼び出したのは、科学部部長白崎とマサキ。
「俺も暇じゃないし」
「ねー、早く言えよォ」
「え…あぁ…その…姉の反応がどうも素っ気なくて」
「「へえ」」
反応うす！！　こっちも素っ気ねぇ！！
「で、あんたはどうしたいワケ？」
「……」
「まとまってない感じィ？出直して来いよッ」
と、言うのを後に二人は帰ってしまった。

□■□ｃｈａｎｇｅ□■□

「なあ、マサ」
「どしたの、みーくん」
みーくんとは白崎の下の名前…実（みのる）から取ったものだ。
「あいつのこと、応援しねーでいいの？」
「別にィ～」
「好きだったんだろ？」
歩いていたマサキの足が止まる。

そして、白崎の方へ向いて
「それは前の話」
「今は？」
「あんたが好きに決まってんでしょ」
それを聞くと白崎はニッと笑う。
「やっぱ、可愛いなお前」
「それ、竜太のお姉さんにも言ったよね？」

□■□ｃｈａｎｇｅ　龍介ｓｉｄｅ□■□

「ただいまぁ」
「おう、おかえり」
…あれ？竜太、何か元気ねぇな。
「どこ行ってたんだよ？」
「別に」
「…あっそ」
なんだよ…。　せっかく構ってやったのによ。
そんなとき、携帯が鳴った。　誰だ？
「あ、マサキ…」
「！？」
“マサキ”の名前に反応して振り向く竜太。
「な…なんでマサキのメアドを…じゃなくて…マサキが姉ちゃんのメアドを…」
「友達だからね」
とメールを返しつつ言う俺。　内容はこうだった。

竜太がへこんでいるようなので
なぐさめてあげてください。

…はあ、そう言う意味？　だから元気ないわけか。
「と…友達？どういう意味なんだよ！」
てゆーか、スゲー元気じゃん。
「うん」
「うん、じゃなくってさ…いつの間に？」
「関係ないだろ」
「うぐ…」
痛いところを突かれて、言葉につまる竜太。
「何？竜太…嫉妬してんの？」
「ち…違うし！！」
あー、こういうやり取り何か久々だなあ…。
ちょっと嬉しい俺だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7028z/

性転換で⇔リア充ライフ！

2012年1月8日21時51分発行